

大学入学共通テストにおける数学分野の出題方針

大学入試センター 大津起夫

1. 高大接続改革に関わる議論の経緯

現在の高大接続改革の動きの多くは、2013年の教育再生実行会議の第四次提言に始まる。ここでは高校教育の多様化、達成度テスト（基礎、発展）、受験機会の複数化が提案された。その後2014年12月には中教審高大接続特別部会の答申において、教科型入学試験から合教科・科目型、総合型試験への転換、年複数回実施、段階別評価、英語4技能試験の導入などが提案された。2016年3月には高大接続システム改革会議の最終まとめが発表され、また2017年7月には文科省より「大学入学共通テスト実施方針」が示された。ここで教科型試験、一部記述式問題の導入、資格検定試験を用いた英語4技能評価の方針が示されたが、合教科・科目型、年複数回実施などの提案について実施は予定されていない。今年6月には大学入学共通テスト実施大綱（文科省）が示され、これに基づく令和3年度入学者選抜試験(2021年1月)の出題方法、問題作成方針が大学入試センターより発表された。問いたい力を明確にした問題作成、大学教育の基礎力となる力を問うこと、高校での学びを踏まえた場面設定が問題作成方針としてあげられている。

2. 大学入試センター試験の現況

平成31年度入学者選抜(2019年1月)については、志願者数57.7万人、現役志願者数46.5万人、現役志願率44.0%、受験者数54.6万人、受験率94.6%であった。教科・科目数は6教科・30科目であり、科目別受験者数は数学Ⅰ・数学Aが39.2万人、数学Ⅱ・数学Bが34.9万人であった。首都圏（埼玉、千葉、東京、神奈川）で数学の受験率が低く（志願者の1/2ほど）、3科目受験者の比率が高い。

3. 試行調査と大学入学共通テストにおける数学の出題方針

当面、大学入学共通テストの実施科目は現在のセンター試験の実施科目と同一である。ただし、国語と数学①（数学Ⅰ、数学Ⅰ・数学A）で一部記述式問題を導入するため、解答時間が国語100分、数学①が70分に拡大される。数学Ⅰ分野において小問3問について簡潔な数式の記述などを求める出題を予定している。問題作成方針では、数学的な問題解決の過程を重視し、事象から数学的問題を見出し構想・見通しをたてること、得られた結果を意味づけ、活用することなどを求めるとしている。大学入学共通テストの出題方針について検討するため、2017年度、2018年度の2回にわたり大規模な試行調査を実施した。大学教員と高校教員による試験問題作成WGを科目毎に設け、試行調査用問題を作成した。いずれも高校生（2年または3年）を対象とするが、2017年は高校で実施し、2018年は大学を会場とした。数学の問題構成はいずれの試行調査も現行試験と類似しているが、出題のスタイルは違っている。試行調査の結果を踏まえて、出題内容を検討している。問題、正解、分析結果は公式サイトで公開されている。（公式サイト <https://www.dnc.ac.jp/>）